

国際文化学部情報学会 映像部門

『Cities on the Move -オンラインホワイトボードツール「Miro」によるアニメーション作品の制作』

稲垣ゼミ

細羽さやか、廣岡未来、上田晃大、原亜由、細川友佑、遠藤瑞宜、矢野広人

私達はオンラインホワイトボードツール「Miro」を使って国際文化学部の留学プログラムである Study Abroad (S A) をテーマとしたアニメーション作品を制作した。

新型コロナウイルスの感染が広がった 2020 年 4 月以降、大学では全ての授業が遠隔で行われるようになった。Hoppii など LMS で各授業内容が示され、Zoom を使ったオンライン講義や YouTube、pdf ファイルでの配信型授業が現在まで続いている。私たち稲垣ゼミでは主に Zoom の Breakout Room を使ったディスカッションを行っていたが、共同制作やワークショップを実施するための環境として、映像を共有できる「Flip Grid」や、共同作業を可能にする「Miro」が並行して使われている。

Miro は、文字を書いた付箋や画像を貼り付け共有することが出来るオンラインホワイトボードツールである。Miro では画像を添付したりマーカーを引いてカテゴリー分けしたりすることも出来るため、参加者の意見の共有が非常にスムーズで、対面授業のできないコロナ禍で役に立っている。また、PC だけでなく、スマートフォンやタブレット端末でも利用出来るため、どこにいても円滑な意見の共有が行える。私たちは Miro での意見交換や情報共有のプロセスを記録することで映像作品の制作に利用できるのではないかと考えた。

作品のテーマを国際文化学部が大学 2 年次に行う SA (Study abroad) での異文化体験にすることにした。現在稲垣ゼミには 2 年生 5 名が参加しているが、新型コロナウイルスの影響で国際文化学部での最も重要な学びの体験である S A が中止され、留学することができなかった。本来なら秋学期には数ヶ月間の海外生活を経験している彼らのために、3、4 年生の S A での異文化体験を 2 年生とシェアできるアニメーション作品を制作することにした。

作品を作る上で参考にした展覧会と作品が三点ある。一つ目はハンス・ウルリッヒ・オブリスト (Hans Ulrich Obrist, 1968-) と Hou Hanru (1963-) による巡回展「Cities on the Move」¹ である。彼らが国や地域をテーマにし、その場所に応じて作品を作り上げた点は、SA での体験を重ね合わせるアイデアのヒントになった。二つ目はナム・ジュン・

¹ Cities on the Move / Urban Chaos and Global Change— East Asian Art, Architecture and Film Now”Hayward Gallery <https://waysofcurating.withgoogle.com/exhibition/cities-on-the-move> (2021.01.23)

パイク(Nam June Paik)の「Electronic Superhighway」²である。ナム・ジュン・パイクは1960年代に世界に先駆けてテレビやビデオを用いた作品を発表し、ビデオアートの父として知られている。20年後、彼はその構想をもとに展覧会を開催する。テレビとビデオというデジタル・デバイスをアートに利用した発想、また様々なデバイスの映像をコラージュした地図のアイデアを参考にした。三つ目はジョゼフ・コーネル(Joseph Cornell)のアッサンブラージュ(asmontage)作品³である。アッサンブラージュとはフランス語で「寄せ集め」という意味で、雑多な日用品や工業生産品などを集め作品を作る。アメリカの彫刻作家であるジョゼフ・コーネルは「シャドーボックス」というガラス張りの箱の中に古道具や雑誌の切り抜きなどを即興的に組み合わせた作品を制作した。様々なものを寄せ集め、その結果新たな面白さを創造する点が、付箋や画像を寄せ集めて即興で地図を作っていくという発想に繋がった。

これらを参考に、私達はMiroでアニメーション映像を制作した。Miroのボード上に世界地図の枠線を描き、それらをMiroのペンツールや付箋を用いて埋めていく作業を撮影し、編集して約20分の映像作品を制作した。世界地図には3、4年生が海外で体験した出来事や思い出、好きだった風景や食べ物などを写真や付箋で表現し、さらに2年生が留学先で体験してみたかったことや留学に対する思いを記述した。具体的には、最初に国々の観光地やメンバーが感じた思い出などを、実際に訪れたときの写真や文字または絵を交えてMiro上に書き込んでいく。次に、その様子をパソコンの画面録画機能を使い、付箋や写真が貼られていく様子を動画として収める。最後にメンバーがその国での驚きやトラブルなど、会話ベースの音声を入れ込むことで完成した。

工夫した点は2つある。1つ目は、留学先の国に絞り世界地図を作成することで、内容の濃い映像制作を心がけたことである。制作メンバー7名の役割を分担し、実際に留学先の国や長期滞在していた国を担当できるように割り振った。また、コロナ禍で留学に行けなかった2年生は留学先でやりたかったことなどを交えることで、我々にしかできない作品を作り上げた。2つ目は、アップとルーズを使い分けて映像制作をしたことだ。動画の最初は部分的な場所しか写さず、徐々に引きの映像になることで視聴者が世界地図に気づくよう撮影した。また、実際に留学先で経験した物語を音声で入れ込むことで、視聴者が制作中の思

² “Electronic Superhighway: Continental U.S., Alaska, Hawaii”, SAAM,
[https://americanart.si.edu/artwork/electronicssuperhighway-continental-us-alaska-hawaii71478\(2021/01/23\)](https://americanart.si.edu/artwork/electronicssuperhighway-continental-us-alaska-hawaii71478(2021/01/23))

³ 「ジョゼフ・コーネル / Joseph Cornell 箱の中の夢のようなアッサンブラージュ作品」、Artpedia アートペディア/ 近現代美術の百科事典、2017年2月28日
<https://www.artpedia.asia/2017/02/28/%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%82%BC%E3%83%95-%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%8D%E3%83%AB/> (最終閲覧日: 2021/01/23)

いを聞くことができるようにした。

結果、二ヶ月間の制作を経て約 13 分間の映像作品となった。導入部分で Miro のツールを使い、作品や参考研究の説明をし、本編に繋げた。冒頭で今回 SA に参加することができなかった 2 年生のチームメンバーが SA に対する気持ちを語っている。次に、スマホの画面から Miro のアプリを開き、Miro 上でアプリのアイコンが付箋で作られていく様子が映し出される。その後本作品に使用したオンラインホワイトボードツール Miro の解説及び先行研究の紹介を Miro 上で付箋や写真を用いて説明し、本編につなげた。本編では SA 先それぞれの国づくりの様子が映し出される。チームメンバーの SA 先にはナレーションが付き、行ったことのない国は出来上がった国をただ映すだけにして差別化を行なっている。映像の最後には世界地図が完成されている様子が写り、制作メンバーの紹介で映像が終了する。

審査後に審査員による評価のポイントが公開されたが、国際文化学部の特徴である SA をオンラインツールを用いてアニメーションによって可視化したこと、新型コロナウイルスの影響により SA が実現出来なかった 2 年生のコメントを入れたことについて高く評価していただいた。今回の作品では、Miro 本来の機能を拡張して捉え、作品を通じて人と人とを繋ぐようなコミュニケーションの場を提供できる可能性を探ることを目的としたが、制作過程を見せたことが受け手によってはそれを単なるアニメーションの作成プロセスではなく、一連の「運動」や、「リアルタイムに作品の制作をしている」と感じさせるような違った見方があることに気づいた。反省点としては、作品のコンセプトは良かったものの映像編集に関する技術的な評価はそれほど高くなかったようだ。オンライングループツールとしての Miro の説明不足や一部の音声の大きさ、前半の冗長な部分など修正すればさらに良い作品を目指すことができたのではないかと思う。

参考文献一覧

Cities on the Move / Urban Chaos and Global Change— East Asian Art, Architecture and Film Now”Hayward Gallery <https://waysofcurating.withgoogle.com/exhibition/cities-on-the-move> (2021.01.23)

“Electronic Superhighway: Continental U.S., Alaska, Hawaii”, SAAM, <https://americanart.si.edu/artwork/electronicssuperhighway-continental-us-alaska-hawaii71478>(2021/01/23)

「ジョゼフ・コーネル / Joseph Cornell 箱の 中の夢のようなアッサンブラージュ作品」、Artpedia アートペディア/ 近現代美術の百科事典、2017 年 2 月 28 日 <https://www.artpedia.asia/2017/02/28/%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%82%BC%E3%83%95-%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%8D%E3%83%AB/> (最終閲覧日: 2021/01/23)

図1～5 対面とオンラインでのミーティングを行い、協力してMiro上で世界地図が作られていく様子を撮影した。以下の図は映像作品からキャプチャーしたもの。

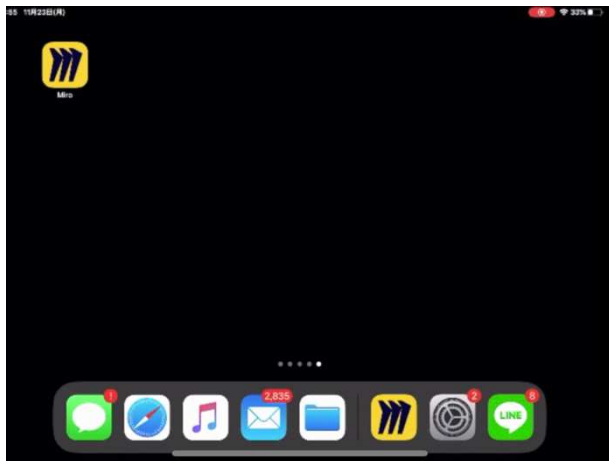


図1 Miroのアイコンをタップし、Miroの世界に入っていく映像から始まる。

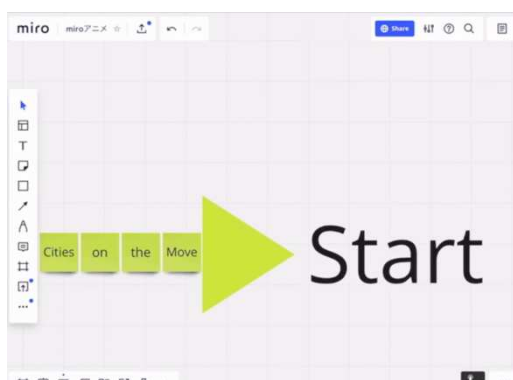


図2 Miro上で制作背景や参考作品を説明後、本編映像に入る。



図3 制作者と留学先、留学の感想を記してある。コロナウイルスの蔓延のため留学に行けなかった2年生は、留学への思いを書いてもらった。

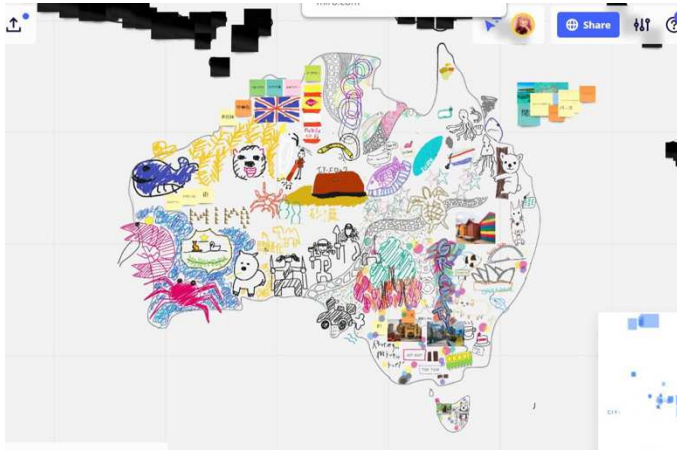


図4 留学の体験やそこで得たイメージをもとに埋められたオーストラリア大陸。その他の留学先の国も同じように、留学した学生によって作られた。



図5 出来上がった世界地図。留学した国は自分たちの経験をもとに彩られているが、その他の国は未だ「暗黒大陸」であるため黒い付箋で覆われている。